

第42回 抗ヒスタミン

抗ヒスタミン薬は花粉症や風邪の症状、かゆみ止めとして配合されていることが多い種類の薬です。「ヒスタミン」に抵「抗」するので、ヒスタミンがさまざまな症状の諸悪の根源であることはまちがいないのですが、そもそもヒスタミンは体の中に必要な物質なのですが、炎症反応にかかわっている物質のため、通常より多く存在すると、鼻水やくしゃみ、かゆみなどが現れる結果となるわけです。ヒスタミンが多くなるのは花粉などの刺激、風邪のウィルスによる刺激、あるいは皮膚への刺激などによって起こるのですが、もともとは体の防御反応であり、外敵から体を守るためにヒスタミンはせっせと働いているわけですが、薬で抑えられてイメージまで悪くなっているのは少し気の毒な気がします（症状のある人にとってはそんなこと思ってもらえないのですが）。

ヒスタミンのことはさておき、抗ヒスタミンといわれるくすりではヒスタミンを直接抑えるわけではなく、ヒスタミンが結合する受容体を抑えることによって、ヒスタミンの効果を減弱させます。ヒスタミンの結合する受容体をH受容体といい、体内のさまざまな部位に存在しており、4種類ほど見つかっています。そのうち、かゆみや鼻水などの症状を出しているのがH₁受容体であり、抗ヒスタミン薬というと主にH₁受容体に作用するもののことをさします。ちなみにH₂受容体は胃に存在していて、ヒスタミンの刺激で胃酸を出すように働くことから、ご存じの方も多いたとは思いますが、この受容体を抑える薬をH₂ブロッカーといい胃酸を抑える薬として広く使われています。

抗ヒスタミンというと切っても切り離せないのが、眠気の副作用です。病院でしかもらえない薬では眠気を起こしにくいものもあるのですが、抗ヒスタミンが入った市販の風邪薬や鼻炎薬には必ずと言っていいほど、「車の運転などは避けてください」といったような記述が入っています。また、この副作用を逆手にとって眠り薬としてや、乗り物酔い止めの薬として売り出されていることもあります。

それでは当院にある抗ヒスタミン薬についてみていきましょう。

レスタミンコーワ錠 : resistant to histamine 「ヒスタミンに抵抗する薬剤」

ペリアクチン錠 : peri- (周辺) + act (作用) → PERIACT 抗ヒスタミン作用に加え、抗セロトニン作用を有し、皮膚科領域の各種アレルギー疾患に有効に作用することから

アゼプチン錠 : 一般名「アゼラスチン塩酸塩」と置換基としての「アゼピン」を合成して命名

ジルテック錠 : cetirizine (セチリジン : 一般名) の下線部の逆順 Ziritec より

次回は、肝臓の疾患に用いられるくすりです。